第19講　漢詩・「漱石枕流」

一　詩を読んで、次の問に答えよ。

『宿㆓建徳江（けんとくかう）㆒』ル　　孟浩然（まうかうねん）

第1句　移㆑舟（シテ）（ヲ）泊㆓煙渚（はくス）（えんしょ）㆒（ニ）

第2句　日暮（にちぼ）客愁（かくしう）新（タナリ）

第3句　野曠（ひろクシテ）天（ハ）低㆑樹（たレ）（きニ）

第4句　江（かう）清（クシテ）月（ハ）近㆑人（シ）（ニ）

注　建徳江…今の建徳市付近を流れる川。
　　煙渚…もやにつつまれた岸辺。
　　客…旅。

問一　この詩の形式を答えよ。

問二　韻字をすべて抜き出せ。

問三　対句の有無を答えよ。また、ある場合は、何句と何句が対句か答えよ。

★「盛唐の詩人」

【李白(りはく)】
・「　　　　」と称される。
・玄宗皇帝に仕えるが、後に追放される。
・自由奔放な作風。
・酒・自然・友人の歌が多い。

【杜甫(とほ)】
・「　　　　」と称される。
・玄宗皇帝に認められるものの、左遷され、その後は不遇。
・不遇な人生から、憤りや悲しい内容の詩が多い。
・政治・社会を描いたものも多い。

【その他】…**孟浩然(もうこうねん)**・**王維(おうい)**（←「詩仏(しぶつ)」と言われる）など

★「中唐の詩人」

【白居易(はくきょい)】
・字＝楽天。
・平安時代の日本に与えた影響大。『枕草子』や『源氏物語』にも引用される。
・『長恨歌』（←玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋が題材）・『白氏文集』が代表作品。

【その他】…**韓愈(かんゆ)**・**柳宗元(りゅうそうげん)**など

二 詩を読んで、次の問に答えよ。

『早 発 白帝城』

朝 辞 白帝彩雲 間

千里 江陵一日 還

両岸 猿声啼 不 住

軽舟已 過 万重 山

注　辞…別れを告げる。　江陵…今の湖北省荊州市。白帝城から江陵まで舟で約一日かかる。

問一 この詩の形式を答えよ。

問二 韻字をすべて抜き出せ。

問三 この詩の作者は別名「詩仙」と言われている。それは誰か。次の中から選べ。

ア 白居易　イ 杜甫　ウ 李白　エ 王維

三　詩を読んで、次の**問**に答えよ。

我来(きたリテ)二揚子江頭(とうニ)一望(メバ)

一片(いつぺんノ)白雲数点(ノ)□

安(ンゾ)得(ン)丁置(キ)二身(ヲ)天柱(ノ)頂(いただきニ)一

倒(さかしまニ)看(みルヲ)丙日月(じつげつノ)走(ルヲ)乙人間(ヲ)甲

注　揚子江…長江の別名。「揚子江頭」は「長江のほとり」の意味。
　　天柱…神話の中に出てくる、天を支えているという柱。

問一　傍線部「一片白雲数点□」について、（a）空欄に入る語と、（b）この句全体の解釈との組み合わせとして最も適当なものを、次の中から選べ。

ア（a）淡――（b）白い雲の切れ間から数本の淡い光が差し込んでいる。

イ（a）楼――（b）空の片隅に浮く白い雲と幾つかの建物が見えている。

ウ（a）雨――（b）白い雲が空一面に広がり雨がぽつぽつと降り始める。

エ（a）山――（b）ひとひらの白い雲と幾つかの山があるばかりである。

オ（a）鳥――（b）空には一つの白い雲が漂い数羽の鳥が飛んでいる。

四　詩を読んで、次の**問**に答えよ（なお設問の都合で、送り仮名を省いたところがある）。

江楼（注）夕望招クレ客ヲ

第1句　海天東望夕茫（ぼう）茫（ぼう）（注）

第2句　山勢川形闊復長

第3句　灯火万家城ノ四畔

第4句　星河一道水ノ中央

第5句　風ハ吹ク二古木ヲ一晴天ノ雨

第6句　月ハ照ラス二平沙ヲ一夏夜ノ霜

第7句　能（注）（よ）ク就（注）（つ）キテ二江楼ニ一銷（け）スヤレ暑ヲ否（いな）ヤ

第8句　比（注）スレバ二君ガ茅（ぼう）（注）舎（しゃ）ニ一校（やや）清涼ナラン

（白居易『白氏文集』）

注　江楼…江（かわ）のほとりのたかどの。　茫茫…ひろびろとしている。

能～否…～することができますか？　就…（場所）で。

比A校B…Aにくらべて少しはB。　茅舎…茅葺（かやぶ）きの家。

問一　この詩の形式を答えよ。

問二　韻字をすべて抜き出せ。

問三　第2句の書き下し文として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　山の勢い川の形の闊(ひろ)く長きを復(ふく)す。
イ　山勢川形、闊(ひろ)くして復(また)長し。
ウ　山は川の形の闊(ひろ)くして、復(また)長く勢いよし。
エ　山の勢いも川の形も、闊(ひろ)くして復(ふたた)び長し。

問四　この詩には二組の対句がある。その組み合わせとして最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　第1句と第2句　第3句と第4句
イ　第2句と第4句　第5句と第6句
ウ　第3句と第4句　第5句と第6句
エ　第4句と第5句　第6句と第7句

五 文章を読んで、次の**問**に答えよ（なお設問の都合で、送り仮名を省いたところがある）。

孫子荊（そんしけい）（注）、年a少時、欲レ隠（シ）（注）レント、語二ルニ王武子（わうぶし）（注）一ニ、当レ枕レ石ニ漱レ流ル、誤リテ曰ハク、「漱レギ石ニ枕レスト流ニ。」

王曰ハク、「流レハb可レ枕ス、石ハ可レ漱グ乎（かト）。」孫曰ハク、「c所二以ハ枕レスル流ニ、欲レスレバナリ洗二ハント其ノ耳一ヲ。所二以ハ漱レグ石ニ、欲レスレバナリトみがカント礪二其ノ歯一ヲ。」

（『世説（せせつ）新語』）

注　孫子荊…人名。
　　隠…隠遁する。
　　王武士…人名。

問一 傍線部a〜cの読みをそれぞれ送り仮名も含めてすべて平仮名で答えよ（現代仮名遣いでよい）。

a＝

b＝

c＝

問二　二重傍線部の再読文字「当」と同じ読みである再読文字を、次の中から選べ。

ア　須　イ　応　ウ　将　エ　宜　オ　盍

★「漱石枕流（そうせきちんりゅう）」＝

第19講　確認問題

① 詩を読んで、次の問に答えよ（なお設問の都合で、返り点と送り仮名を省いたところがある）。

春江　（唐）白(はく)居(きょ)易(い)

第1句　炎(えん)〔注〕涼(りやう)昏(こん)暁(げう)苦(はなは)ダ推〔注〕遷シ

第2句　不レ覚エ忠〔注〕州ニ已(すで)ニ二年

第3句　閉〔注〕ザシテレ閣ヲ只(た)ダ聴ク朝〔注〕暮ノ鼓(つづみ)

第4句　上楼空望往来船

第5句　鶯(あう)声(せい)ニ誘(いう)引(いん)セラレテ来タリ二花下ニ一

第6句　草色ニ勾(こう)留(りう)セラレテ坐ス二水辺ニ一

第7句　唯ダ有リ二春江ノ看レドモ未ダルレ厭カ一

第8句　縈(めぐ)リレ砂ヲ遶(めぐ)リテレ石ヲ緑潺(せん)〔注〕湲(ゑん)タリ

（『白氏文集』巻十八）

注　炎涼昏暁…暑さと寒さ、夜と朝。
推遷…移り変わる。
忠州…今の四川省忠県。作者はここに左遷され、二年間の役人生活を送った。
閉レ閣…建物にとじこもること。
朝暮鼓…朝夕の時刻を知らせる太鼓の音。
潺湲…水のさらさら流れるさま。

この詩は七言律詩である。押韻しているのはどの字か。最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　遷　年　船　湲
イ　年　船　辺　湲
ウ　遷　年　船　厭　湲
エ　遷　年　船　辺　湲
オ　年　船　辺　厭　湲

② 「所㆓以ノ養㆑フ母ヲ者ハ㆒」の傍線部の読み方として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　いはゆる　　イ　ところをもつて

ウ　ゆゑん　　エ　ここをもつて

③ 「当極怒嘔血」は、「当に怒りを極めて血を嘔かしむべし」と読む。どのように返り点をつけるのがよいか。最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　当㆓極　怒㆒㆑嘔㆑血

イ　当　極㆑怒㆑嘔　血

ウ　当㆓極㆑怒　嘔　血㆒

エ　当㆑極㆓怒　嘔㆒血

オ　当㆓極㆑怒　嘔㆒㆑血

〈Memo〉

第19講　解答

★【李白】…「詩仙」
【杜甫】…「詩聖」

一

問一　五言絶句
問二　新・人
問三　有り／第3句と第4句

二

問一　七言絶句
問二　間・還・山
問三　ウ

三

問一　エ

四

問一　七言律詩
問二　茫・長・央・霜・涼
問三　イ
問四　ウ

五

問一　a　わかき　　b　べく　　c　ゆえんは

問二　イ

★「漱石枕流」＝負け惜しみの強いこと。

〔現代語訳〕

一

『建徳江で舟に宿る』

舟を移動して、夕もやにつつまれた岸辺に泊まる。
日暮れに、旅の愁いが新たに湧いてくる。
野原は広々とし、天は木に垂れそうなほど低く、
川は澄んでいて、月は手に届きそうなほど近い。

二

『早朝に白帝城を出発する』

朝早く、白帝城に朝焼けの雲がたなびくころ、（白帝城に）別れを告げる。
千里も離れた江陵まで、一日で帰る。
両岸の猿の鳴き声が絶えることなく、
軽快な舟はすでに幾重にも重なっている山々を通り過ぎる。

三

私が揚子江のほとりに来て望見すれば、
ひとひらの白い雲と幾つかの山があるばかりである。
我が身を天柱の先端に置いて、
太陽や月が人間界を巡っていくのを上から逆に眺めてみることができようか、いやできない〔が、眺めてみたい〕。

四

『河のほとりの高殿で夜の景色を望み、客を招く』
海の水平線のかなたを東に見ると、薄暗い夜の景色が広々と果てしなく広がっている。
山の姿も川の形も、広くかつ長くつながっている。
灯が多くの家々に灯り、街の四辺にまでも広がり、
天の川が一筋に、河の真ん中にかかっている。
風は枯れ木に吹きかかり、晴れているのに降っている雨の音のようである。
月は砂を照らし出し、夏の夜の霜のように白く光っている。
水辺の高殿で、暑さを忘れてみないか。
君の茅葺きの家に比べて、少しは涼しいであろう。

五

孫子荊は、若い時、隠遁しようと思い、王武士に語るときに、石を枕にして川の流れで口をすすごうと言うべきなのに、間違って言うことには、「石で口をすすぎ川の流れを枕にする」と。王武士が言うには、「川の流れを枕にできたり、石で口をそそぐことができたりするのか」と。孫子荊が言うには、「川の流れを枕にする理由は、耳を洗いたいと思うからである。石で口をそそぐ理由は、歯を磨こうと思うからである」と。

第19講　確認問題　解答

〔解説〕

① 七言詩なので、初句と偶数句の最後の文字が押韻する。よって、正解はエ。

② 「所二‐以」は「ゆゑん」と読み、「原因・理由・手段・方法」の意味を表す。よって、正解はウ。

③ 「当に〜べし」と読むことから、「当」は再読文字だとわかる。したがって、返り点のついていないイは不適。次に「怒りを極めて」と読むことから、「極怒」は下の一字から返って読んでいるので、「極」にはレ点をつける。したがって、アとエも不適。次に「血を嘔く」と読むことから、「嘔血」の「嘔」にもレ点がつくのでウも不適。よって、正解はオ。ちなみに、「嘔」から再読文字「〜べし」に二字以上戻るため、「嘔」には一レ点、「当」には二点がつく。

〔解答〕

① エ　② ウ　③ オ